

監修の言葉

ここ数年、本邦での2型糖尿病患者数は激増している。厚生労働省発表から計算すると、HbA_{1c}値が5.9%以上、すなわち日常生活下に間違いなく糖尿病状況にある、ととらえられる人数は2002年には1,000万人であったが、'06年には1,400万人へと増加している。

糖尿病は典型的な全身疾患であり、全身の血管を、臓器を障害させる疾病である。症状のない時期から血管障害の発症予防をめざして的確な治療をすべきことは、高血圧、脂質異常症に対する治療と同様である。“糖尿病”と一口でまとめているが、その病態は一例一例で異なり、かつ同一例においても治療介入で病態は刻々と変動している。

近年、膵 β 細胞、脂肪組織、骨格筋、肝臓、腸、脳などにおいて血糖コントロールに寄与する新たな機構が次々と解明されている。臨床においても新しい概念に基づいた新たな手段が次々と登場してきた。糖尿病患者を一例もご覧になっていない医師は皆無であろう。日常診療で早期発見、病態生理の把握、的確な治療介入、へのヒントになれば、と本書を企画した。執筆は若手医師が日常的に実践している診療を省みながら診療の実践をわかりやすく解説している。一度手に取っていただき、彼らの勉強のためにも厳しいご批判、ご意見を賜われば監修者として幸せである。

2007年8月

河盛隆造